

と考えられ、梓巫として活動していたこと、そしてミコガミサマを奉じて自らもまたミコガミになるという特徴を有したからであるろうと思われるのである。

在地においては、現在もそうであるように、陰陽師も博士もともに在俗下級神主を指す「太夫」の名で呼ばれており、民俗誌も「太夫さんと呼んで祈禱してもらう」とあるばかりで、それが陰陽師だったのか博士だったのかは明確でないのが常である。事実、その出自において両者にそれほど隔りがあつたとは思われず、一般的に陰陽師の多い郡には博士少なく、博士の多い郡には陰陽師が少ないことからすると、単にどちらの組織に組込まれたかによって分かれた部分もあつたと思われる。博士の使った「いざなぎ流祭文」は中世祭文のなごりを留めているとされるが、陰陽師を組織した天社神道が起こされたのは近世であるから、両者の淵源に強いて差を求める必要はない。しかしながら、神子的宗教者のある部分が後世において陰陽師となっているからには、そこには何らかの理由なり契機が存在しなくてはならない。今ここに一つだけ示し得るのは、陰陽師が長岡郡に集中していることについてである。

天社神道の創始者は安倍泰福であるが、民心に深く根ざした陰陽五行説を利用して、幕府天文方の渋川春海の協力を得て垂加神道創唱期の山崎暗斎の門に入り、その直弟子ともなつて天社神道を国家的ならしめ、かつ諸国に陰陽師免許を出すまでに発展したのであつた。渋川春海もこの系統で名をなしたが、この弟子に谷重遠がいる。谷重遠の著『泰山集』には、「能伝」上古之風「深知」

王者之天業、者莫_レ如_二安家_一。雖_二吉田_一不_レ及也、諸家不_レ知_二此_一、只為_二卜筮祈禱之家_一、可_レ恨也」とあつて、安家すなわち天社神道を第一と奉じている人物であるが、この人は土佐長岡郡八幡村別宮八幡宮祠官の家柄であり、このことが、長岡郡の陰陽師系宗教者を陰陽師として天社神道に参与させた一要因ではないかと思われるのである。

土佐の陰陽師と博士とについて、その異同の一端を示した。

五行志の性格について

今 井 秀 周

五行志は『漢書』に初めて設けられた、様々な自然現象や不可解な出来事を分類配列し、陰陽五行説を基盤とする思想によって解釈を加えたものである。ところが、それら神秘的なそして論理的にはこじつけともいふべき思想は、漢代を頂点として衰えるにもかかわらず、五行志は依然として歴代の正史に継載されていつた。それは何故か。また、志なるものは、単なる滅びた王朝の諸文化の記録としてばかりでなく、その修纂を命じた者にとって為政に積極的に使用すべき資料でもあつたと考えられるが、しかしながら五行志の存在意義は、他の諸志に比べるとどうも漠然としてとらえ難い。そこで甚だ簡単ではあるが、ここに歴代五行志の内容変化を跡づけると共に、その性格を考えてみようと思う。

まず『漢書』五行志の著わされた目的は何であつたか。その序

文を要約すると、

古、天がこの世界を治める聖人に下し与えた『河図』『洛書』なる書があったが、これに基づく陰陽説や五行説によって学問しているはずの学者達は、孔子の著した『春秋』に現れる諸事象の解釈に於て、必ずしも見解を同じくしていない。よってそれら諸説を総合分類し、さらにこれを以て前漢時代に起った諸事象をも考えたい。

とあり、非常に多くの紙面を費して諸説が纏められている。この内容を通じて特徴的なのは、天人相関思想で満たされ、災異説の発明されたことである。これを首唱したのは董仲舒・劉向をはじめとする漢代最高の儒学者らであり、国教として採用された当時の儒学に古来の神秘的な思想が多分に含まれていたといわれる所以のものであるが、それにもまして着目すべきは、五行志に記された思想が、漢代の政治政策にそのまま具現されていたことである。即ち、ここに記される災異説によって、異常な自然現象等が起る毎に必ず誰かしら罰を被る者が出て、政策にもその影響が及んだのである。従って『漢書』五行志は、漢代儒者の天然現象に関する理論の集成としてのみならず、政治と直結したものであったことを認めなくてはならない。

後漢になると、これに讖緯思想が加わる。所謂予言であって、災異説とは全く逆の論法をとる。災異説の「――は……の応報」、讖緯の「――は……の前徴」という二つの論法を以てすれば、如何なる自然現象をも人事と結びつけることができる。そして以後の五行志は、これらの理論に則ってあらゆる自然現象の解明を行

っていくのである。

しかしながら、これらは儒者に成るものであるから、その後六朝時代に入って儒教が衰えると、天人相関思想の拘束力も格段に減少する。『廿二史劄記』巻2、漢儒言災異の項には、

……降及後世、機智競興、權術是尚、一若天下事、皆可以人力致、而天無權、即有志圖治者、亦徒詳其法制禁令、為人事之防、而無復有求端於天之意、故自漢以後、無復援災異以規時政者、間或日食求言、亦祇奉行故事、而人情意見、但覺天自天、人自人、空虛寥廓、與人無涉、

とある。即ち五行志はここに政治に資するの用を幾んど失ったのである。ところが五行志は廃されるどころか、その時代時代に起った現象の記録を書き替えるだけで、しかも災異説等による解釈を依然そのままに残して継承される。勿論、各五行志間には項目の増減があり、解釈には精粗の違いがあつて、必ずしも一様ではない。とはいへ、それらはあくまでも量の差であつて、質の変化ではないのである。

やがて、こうした五行志に批判を加えるものが現れる。まず唐代には、劉知幾の『史通』が特に五行志錯誤・五行志雜駁なる章を設けて、『漢書』五行志の文の錯雑して誤り多きことを詳述した。続いて宋代になると、鄭樵が『通志』を著し、その総序にはこういう。

……洪範五行伝者、巫瞽之学也、歷代史官、皆本之以作五行志、天地之間、災祥万種、人間禍福、冥不可知、……董仲舒以陰陽之学、倡為此説、本於春秋、牽合附会、歷世史官、自

愚其心目、俛首以受寵罩、而欺天下、

即ち五行志には附会の説多きにもかかわらず、歴代史書は愚かしいことにこれを襲っていると酷評するのであるが、とりわけ、占いなどあてにはならぬと断じた所は注目し値する。併し、この鄭樵の主張は、すぐには正史に反映されなかった。

五行志自体の中から、従来の形に対する異論が出されるのは『元史』になってからである。しかしながらそれは、劉向らの説は未だ確かとはいえぬから更に古き説に拠るべきだと序に説くまでで、その実はほとんど変っていない。災異説等にはきりきりした批判的態度をとるのは、次の『明史』である。その序文を要約するところある。

天人の感応が類別されておこるとは、理なきことではない。

しかし五行志の分類注釈は煩瑣に過ぎ、父子師弟間の伝授ですら矛盾を生じてしまう。いったい天人相い応じることを知れば、誰しも人は言動を慎しむであろうから、これで戒を垂れるのも悪くはない。しかし、両者の間には必ずしも関連を見出し得ない為に、それを知った者は怠惰に陥ってしまう。

孔子は『春秋』に異常な事象を記しても、それを解釈したりしなかった。かの劉・董の学は古いごとに近く、継承するには足りぬもの。『漢書』五行志が創立されたのも、そうした彼らの学の本原を詳かにせざるを得なかったからである。しかるに、歴代の正史はこれを無闇に書きついできた。

このように『明史』五行志は、天人相関思想の道德面における効用を認めつつも、その必ずしも取るに足りぬことを表明し、序に

尋いで記される諸現象の記録には解釈等を一切付加せず、ただそれを羅列するだけに止めているのである。

では総じて五行志とは何であるか。まず五行志が『春秋』に記された災異等に関する漢代儒学者の解釈を総合することに始まり、そして各正史に絶えず収められたことを考えると、それが儒者にとって欠くべからざるものであったことを推測せしめる。且つまた、もと陰陽五行で以て説明される災異説や讖緯などの理論がほぼそのままの形で受けつがれ、これを否定するものが終ぞ世に出なかったことを見ると、少々の整理の外にはもう更める所のない完成したものであったと見做し得る。畢竟五行志なるものは、所謂十三經に代表される儒教經典が専ら人間の事をいうのに対し、そこからは説き得ない自然界の理を述べるためのものと言うことができると思う。換言すれば、自然現象を解説する最高の科学書なのである。漢よりの後、天人相関思想の衰えたことは先に述べたが、ただそれは政治的な拘束力が失われたのであって、その後は次第に弱体化しつつも道德的拘束力に変わってかなり長く存続した。そして五行志がその理論面を維持していたのである。五行志がもとのままの形を長く存続したのは、以上の如き性格を有し、尚ばれた為に外ならない。よって、中国に於ける科学の後進性を示すものとして五行志を取り上げるよりも、それ自体が科学の進歩を碍げる方向に働いた点をより重視すべきであろう。